

—教職員のみなさまに役立つピックをお届けします—

## 人が持ち得る寛容性と優しさ

グリーン社会協創機構 地域防災減災センター 神田 孝文 特任助教

災害が起こるとき、私たちが問われているのは、社会の備えの「強さ」だけでなく、人と人がどのように支え合い、どんな心で向き合っているのかという社会の「ありよう」です。避難所では、性別だけでなく、年齢や文化的背景によっても必要とする支援は異なり、その違いを面倒だと切り捨てず、理解しようとする寛容さと、相手の立場に寄り添う優しさが、誰もが安心して過ごせる空間をつくる土台になります。

防災におけるジェンダーギャップとは、例えば災害対応の場に女性が少ないことや、避難所での生理用品・プライバシーへの配慮不足、ケアの役割が女性に偏りがちなことなどがあります。また、地域防災リーダーや復旧・救援活動の担い手が男性に偏ることで、長時間の活動や強い責任感から心身の不調や孤立といった男性特有の悩みも生じます。こうした現実を踏まえると、防災を進めるうえで知識や技術の習得は重要であると同時に、「この状況で誰が困るのか」「どうすれば支え合えるのか」と問い続け、他者の思いや背景を想像する力を育てることが欠かせません。

防災は一部の専門家や関係者だけが担うものではなく、社会のすべての人が互いを理解し、支え合う実践そのものです。だからこそ、多様な人々の経験や思いが計画段階から反映さ

れるよう、男女共同参画・ジェンダー平等の視点を取り入れるとともに、人間が本来持っている寛容さと優しさを日々の暮らしのなかで息づかせていくことが、災害に負けない社会を築く第一歩になるのではないでしょうか。



石川県能登半島でPBL (Project-Based Learning:課題解決型学習)を実施 ▶

### PBL (Project-Based Learning : 課題解決型学習)

学生が実社会の未解決な課題に対し、チームでリサーチ・仮説構築・解決策提案を行う実践的な教育手法です。知識の暗記ではなく、主体的な探究プロセスを通じて思考力、行動力、協働力を養う「アクティブラーニング」の代表的な学習法です。

### 多様な視点が高める防災力 — 女性の参画から考える、これからの防災 —

東日本大震災から15年。震災で明らかになった女性や子育て世帯の避難生活の課題を、現在の防災の取組に生かそうとする動きが進んでいます。

2011年の東日本大震災時の避難生活では、女性用の衛生用品の不足や、授乳・着替えのためのプライバシー空間の不足など、女性や子育て世帯のニーズが十分に反映されない場面があったことが指摘されました。こうした経験を踏まえ、内閣府は「災害対応力を強化する女性の視点～男女共同参画の視点からの防災・復興ガイドライン～」を示し、防災・復興の取組を進めています。ガイドラインでは、①女性の主体的な参画②男女のニーズの違いへの配慮③意思決定の場への女性の登用、この3つを重要な視点として掲げています。

災害時に誰もが安心して過ごせる環境をつくるためには、多様な視点を防災の取組に生かすことが欠かせません。防災においても、さまざまな立場の人が参画することが、誰もが安心して暮らせる社会づくりにつながります。これを機会に、DEIの視点から防災について考えてみてはいかがでしょうか。

2017年7月に発生した「九州北部豪雨災害」では、「みんなの声の箱」を通じて、多岐にわたる意見や声が拾い上げられました。



出典:内閣府 『災害対応力を強化する女性の視点～男女共同参画の視点からの防災・復興ガイドライン～』

● **令和8年(4-9月期) 研究補助者制度の利用者が決定しました**  
 令和8年度(4-9月期) 研究補助者制度の利用者を厳正な審査のうえ決定しました。

選考結果 利用決定者13名(女性8名、男性5名)

研究補助者制度の活用により、育児・介護と研究を両立しながら研究活動を進めることができ、論文発表や学会発表などの成果にもつながっています。

また、補助者として参加する学生にとっても、研究現場を身近に体験しながらスキルを高め、研究者というキャリアを考えるきっかけとなっています。

### 【研究補助者からの感想】

- ・自身の研究に繋がる知識を得られた
- ・研究能力が上がった
- ・将来をイメージする機会となった
- ・ロールモデルとなった など



※研究補助者制度については、以下をご参照ください。  
<https://www.shinshu-u.ac.jp/danjo/initiatives/kenkyujo.php>

● **大学入学共通テストにおいて一時保育を実施しました**

1月17日、18日に実施された大学入学共通テストの際に、松本キャンパスと長野(教育)キャンパスにおいて入試業務に従事する教職員のお子様をお預かりしました。延べ8名のお子様をお預かりしました。

● **同性パートナーシップにも福利厚生を適用**

本学では、DE&Iの推進と就業環境のさらなる整備を目的として、多様な背景を持つ教職員が能力を十分に発揮できる環境づくりを進めています。その一環として、同性パートナーがいる教職員にも、法律上の配偶者や事実婚のパートナーと同様の福利厚生(休暇・休業・手当・旅費等)を適用できるよう、令和8年度中に制度導入に向けた具体的な検討を開始いたします。運用の詳細が決定次第、改めてお知らせいたします。



このコラムは、本学で“活き活き”働く教職員がリレー形式でお届けする“粋”なコラムです。

こうさか やすひろ  
**高坂 泰弘 教授** | 学術研究院 (繊維学系)

#### 家族構成

妻、長女(11歳)  
 長男(9歳)、次女(3歳)

#### あなたのリラックス法は？

昼休みに一時帰宅しての料理。子供が習い事前に食べる軽食を作ることも。制限時間内に片付けまで終わらせる、タイムアタックでもあります。



▲ヴァイツェンで乾杯! (長女撮影)

## 9歳からの国際学会デビュー



▲招待講演の一幕。“My daughter is...”に娘が反応して驚愕!

正式に招待講演をお願いしたく——ドイツの国際会議から、嬉しいメールが届きました。ただ、我が家はフルタイムの共働きで、3人の子育て真っ最中——果たして、行けるのか? 妻曰く、「子供3人を残されるのは無理。でも、長女を連れて行くならOK」「ええ!! 逆にいの?」...実は長女との旅は、ちょっとした夢だったんです。我が子には早く、世界を見せたいと思っていました。そんなわけで、子連れでの国際会議です。

「あの先生はノーベル賞候補だよ」

「女性研究者も活躍しているね」なんて話をしたと思えば、私の講演後には「パパやめてよ、講演中に私の話をしたでしょ」あれ? 英語わかるのか! ?と、これには私もビックリ。最終日には共同研究者を訪問し、海外の大学の雰囲気も味わえました。

あれから1年半が経ちますが、今でも思い出話をします。娘にとっても、よい経験になったでしょう。次は長男と、行けるかな?



▲ドイツ名物カレーヴルスト(右)とその進化系(左)



▲国際会議の舞台はドイツ・マインツ



お問い合わせ

信州大学 DE&I推進センター (SuFRE)

〒390-8621 松本市旭 3-1-1  
 内線 811-2150, 811-2140  
 TEL 0263-37-3150 FAX 0263-37-3314  
 mail sufre@shinshu-u.ac.jp

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。

教育学部分室 〒380-8544 長野市西長野 6-口 内線 831-4018	工学部分室 〒380-8533 長野市若里 4-17-1 内線 821-5693	農学部分室 〒399-4598 上伊那郡南箕輪村 8304 内線 851-3120
--	---	--

繊維学部分室  
〒386-8567  
上田市常田 3-15-1  
内線 841-5031

信州大学 スプレ

検索

▶ <https://www.shinshu-u.ac.jp/dei/article/sufre/>